

平成28年 丹波市10大ニュース

タイトル及び説明	
1	<p>第2代丹波市長誕生、初当選議員の躍進</p> <p>11月20日に丹波市長・丹波市議会議員選挙が執行され、谷口進一氏が第2代丹波市長に当選。</p> <p>谷口進一新市長は、3期12年務めた辻重五郎市長の後を受けて、市政のかじ取りを担い、新たなまちづくりに取り組む。</p> <p>また、丹波市議会議員も定員20人のうち新人が11人当選し、新しい視点加わり、丹波市のさらなる発展が期待される。</p>
2	<p>丹波市豪雨災害からの着実な創造的復興</p> <p>発災から3年目を迎え、復興の土台となる復旧工事全372箇所は着工率97%、完了率86%（10月末）で、年度内には3箇所を除き完了予定である。また、公営住宅の一時避難者は5世帯14人に減少、平成29年8月末には全世帯復帰を迎える。復興の取り組みにおいては、災害残土を利用した再圃場整備事業、アジサイ栽培、剪定枝利用の無農薬無化学肥料による野菜栽培など、被災前には見られなかったまちづくりの芽が萌生。平成28年5月時点での意識調査における（数字で表す）復興度合いは「56.2%」であり、確実に一歩ずつ創造的復興に近づいている。</p>
3	<p>丹波竜化石発見から10年、新たに卵化石の発見と全身骨格模型の設置</p> <p>1億1千万年以上前の丹波竜化石が、平成18年8月に発見されてから10年を迎えた。その記念すべき年の初めに発表されたのが「国内初となる卵化石が密集した形で発見！」の一報であった。</p> <p>2015年10月に上久下地域自治協議会主催（丹波市、人と自然の博物館協力）で、丹波竜化石が発見された近くの地層の試掘調査を実施したところ、卵化石が複数発見された。この卵化石は、小型の獣脚類恐竜もしくは鳥類と考えられ、国内では例がなく、世界的にも極めて稀な発見とされている。この貴重な化石は、今も調査研究が進められている。</p> <p>また、10周年記念事業の第1弾として、4月には念願であった丹波竜の全身骨格模型が「丹波竜化石工房ちーたんの館」に完成した。丹波竜は「タンバティタニス・アミキティアエ」と命名された茶褐色の大型草食恐竜。骨格は、全長15メートル、高さ3.5メートルの実物大の大きさで、来館者を圧倒している。</p> <p>4月29日のリニューアルオープン初日には、1,900人もの恐竜ファンが来館し、入館制限がされるなどちーたんの館は、かつてない大盛況となった。これからも、展示物の充実を図り、市PRのツールとして交流人口を増加させていく。</p>
4	<p>丹（まごころ）の里創生総合戦略策定</p> <p>3月、人口減少問題を克服し、活力ある丹波市を維持するために、丹波市人口ビジョン・丹波市丹（まごころ）の里創生総合戦略を策定した。</p> <p>総合戦略では、2060年に半減すると予想されていた人口を、50,000人程度確保する目標を掲げている。「市民一人一人が個性と持てる力を発揮し、持続的に発展するまち」を将来像として、「自然減をくい止める」「社会増に転じる」二つの基本的な方向性とともに「活躍人口を増加させる」という独自の視点を加えている。4つの基本目標と72の具体的施策を定めて、地方創生に取り組んでいる。</p>
5	<p>ふるさと教育「たんばふるさと学」を全小学校で展開</p> <p>子どもたちの豊かな心やふるさとへの愛着・誇りを育むため、全ての小学校に学校と地域を結ぶ学校支援コーディネーターを配置し、「たんばふるさと学」を推進した。学校支援コーディネーターの協力のもと、地域からゲストティチャーを招き、ふるさとの自然・歴史・文化・産業・人物などを活用した学習を行った。</p> <p>また、中学校では、市の地域資源・課題をもとに自分の将来の姿を考える「たんばみらい学」を中学校1校で研究し、ふるさと教育に結びつけたキャリア教育の取り組みを開始した。</p>

タイトル及び説明	
6	<p>丹（まごころ）の里手話言語条例施行</p> <p>すべての市民が、手話が言語であることを理解し、誰もが社会参加できるこころ豊かな住みよい丹波市となることを目指して―。という前文から始まる、丹波市丹（まごころ）の里手話言語条例が4月1日施行された。</p> <p>全9条からなる条例は、手話を必要とする市民が、あらゆる場面で手話による意思疎通を行い、自立した日常生活を営み、社会参加をし、安心して暮らすことのできる地域社会が実現することを目的としている。本年度より条例に基づき、手話の普及・推進に努めている。</p>
7	<p>丹波市版「半農半公」制度スタート</p> <p>市の農業が抱える深刻な課題として、担い手不足や高齢化等がある。</p> <p>こうした課題を解決するため、都市部から丹波市に移り住んで、農業を行いたいと考える方を地域おこし協力隊（丹波市の非常勤一般職員）として採用。週5日の勤務のうち、1～2日は公務員としての事務、3～4日は農場などの現場で農業技術の習得や課題の把握を行う。期間終了後には丹波市に定住し、就農していく過程の支援を行う。</p> <p>本年度は、11月1日付けで、地域おこし協力隊2人を任用し、丹波市での就農を目指す活動がスタートした。任用期間は、最長で3年間。</p>
8	<p>第2次丹波市道路整備計画策定</p> <p>幹線市道の計画的な整備を図るため、丹波市道路整備計画審議会を開催して審議を重ね、第2次丹波市道路整備計画（平成28～37年度）を策定した。</p> <p>計画路線の内訳は、第1次丹波市道路整備計画からの継続事業7路線、新規の道路拡幅9路線と歩道整備4路線で、合計20路線を計画路線としている。</p> <p>今後10年間に完成または事業着手する整備計画として、市全体の広域的な視点から道路整備を進めていき、利便性の向上、歩行者の安全と交通円滑化のために、事業を推進する。</p>
9	<p>ふるさと寄附金リニューアルで魅力アップ</p> <p>8月、ふるさと寄附金の返礼品の贈呈基準を1万円まで引き下げるとともに、市内事業者の魅力的な記念品を寄附金額に応じて選べるようにした。</p> <p>特産物を全国に発送することにより市内産業の振興に寄与することができる。また、市への訪問のきっかけになるような体験型の記念品を用意し、ふるさと寄附金という財源確保のみならず、今まで丹波市のことを知らなかった方に市の魅力をPRできる絶好の機会となっている。</p>
10	<p>第3次行政改革プラン策定</p> <p>第2次丹波市総合計画の実現を目指すために必要な持続可能な行財政運営の基盤の確立に向けたビジョン（将来展望）として「第3次行政改革プラン」を策定した。</p> <p>今後、喫緊の課題となる本格的な少子高齢化・人口減少社会の到来や、経済成長の鈍化、市民参加型社会への移行など本市を取り巻く社会経済情勢が変化中、人口減少対策などとともに、多様化・複雑化する地域課題に適切に対応することが求められる。</p> <p>「第3次行政改革プラン」に掲げる方針に基づく取り組みにより、行財政運営の基盤を確立し、多様化する市民ニーズや社会情勢に柔軟に対応することを目指す。</p>